

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上徳存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

報恩記

— 白眉殿落慶と先住忌御礼 —

住職 村上 徳存

「瑞應寺僧堂歌」に、
「みどりのかげは 深けれど

紫金の台ぞ そびえたり
新居の広野を 見晴して
わが瑞應の 大精舎

瑞應寺の入口である、大

門より、山門に至る参拝道
路の両側にそびえる老木や
七堂伽藍を蓋う深い叢林の
緑樹も暫く手入れを怠って
いると樹木は伸び放題で、
最近の大風や大雨で、倒木・
落木で被害を受けることは

他人事ではなく森林を整え
ることは大切である。

昨年より、参道脇や、建
造物に掛る老木の手入れを
して、少し見通しは良く
なった。

同様に境内に散在する七
堂伽藍も、長い歴史の中で
は、興廃は止むことを得な
いことです。

この度、法堂の左側、僧
堂の右側より大銀杏を通っ
て石段を登り金毘羅殿の登

る横奥に在る、大鳥居の横
に、旧「養老庵」「白眉庵」も
老朽化で、改築をし、新し
い「白眉殿」として落慶を
迎えた。

抑も、旧養老庵は、
「化して嚴嶋の堂を建るの
序」に

二十二世大機慶道和尚の
代、明治十三年三月に改築
された記録が残っている。

古記録によると、

「敬神の情に厚い、五世再
中興、月庭和尚様は、金毘
羅神と嚴島弁財天を昼夜、
信仰し、堂を建てられ、養
老の地と為られ」と記され
ている。建物は何度も、世
変り、星移りて、廃をくり
返したが、その度に建てら
れたと記録されている。

今年、明治の改築から、
百三十二年であるが、建物
は堅牢で旧養老庵の玄関の
鴨居は立派な物で、二本の
鴨居を「新白眉殿」に転用

した次第である。

二十八世檀崎孝如方丈の
当山晋住は、二十七世松浦
方丈の遷化せられた昭和五
年十月で、旧養老庵の築後
五十年頃と推定され、そし
て移されたのである。

寺族の利都様、一光老師
(中学入学) 三才下の富子
女、通元方丈(五才) 啓吾
さん、他二、三人を養育せ
られた。

それから、令和四年迄、
長い間、世話になった旧養
老庵を「白眉殿」として発
願せられた。東堂老師は、
現在九十七歳、長生せられ
た「報恩行」として、宝物

館として、歴代の禅師、孝
如老僧、橋本老恩師、一光
方丈等の軸等の保管する場
所を計画出資。白石工務店
が設計施工を実施した。協
賛として、住友各社、住友
セクター長、檀家総代各氏、
有縁安居者、銀杏誌購読者

有志諸友の協賛と協力を得
て、完成しました。有難く
深謝いたします。実務は副
住職、金岡潔宗監録が執り
行いました。

付帯事業として、祠堂殿
前に駐車場と、車道が輪蔵
横を通って、金毘羅殿裏道
を同横迄に交通可能としま
した。

落慶法要は五月二日午後
一時より、総代会、白石工
務店側代表者列席の中、式
師、山主、大衆一同で浄道
場、読経、回向にて寄付者
一同家道興隆、修道安穩を
祈願致しました。

次に、数年前より計画し
ておりました、先住忌二十
九世重中興大玄一光大和尚
二十七回忌は、世界的にま
ん延拡大している、新型コ
ロナウイルスによる感染症
によって、各地の会合、イ
ベントも、企画縮小中止の
中、大本山永平寺監院小林



白眉殿落慶法要

昌道老師を焼香導師に懇情
拝請し、寺院約八十名、檀
家総代、世話人代表、親族
等にて勤修し、以て親示報
答の恩忌を報修致しまし
た。遠近より、香資、御供
え等をお送り下さった皆様
に厚く御礼申し上げます。
以上、拝謝御礼申し上げます。
合掌

テレホン法話 (〇八九七 四一〇〇三三)

禅のたより



◆ 相手を思い敬う心

先日、ふとしたことで、とある書き物に出会いました。それは、東京に住まいする竹内さんという友人の、毛筆のステキな一文でありました。文字は勿論、達筆でありましたが、私が心を惹かれたのはその中身、文章なのでありました。

そこにはこう書かれていました。「神様がたった一度だけ、腕を動かして下さるとしたのなら母の肩を叩かせて貰おう。風に揺れるペンペン草の実を見ていたら、そんな日が、本当に来るような気がした」とありました。

何度か読み返すうちに、この詩が胸に沁み込んで来たもので、すから、どういったお方がお書きになったのか知りたくなって調べると、口に筆をくわえて詩や絵を描く星野富弘さんという方なのでありました。

なんと、お体が不自由だったのです。彼は、大学を卒業し、中学校の体育教師になって間

もなく、クラブ活動の指導中に頸椎損傷の大怪我をして、手足の自由を失ったということでありました。

体育の先生ということですから、体を動かす事には自信があつたはずですが、教師として子どもたちに伝えたいこと、社会人となつて親にしてあげたいこと。様々な夢や希望があつたはずなのに、たった一度のアクシデントで、一生動けない身体になつてしまったのです。彼は、やがて自暴自棄となりました。心を閉ざし、荒れた時期を過ごすのです。

そんな荒れた富弘さんに対して、お母さまはいつも笑顔で接し、励まし、傍に寄り添って下さっていたそうです。内心では、代われるものなら代わってあげたい、なんとか元通りの身体になつてもらいたいと、泣きたい気持ち、叫びたい気持ちでいっぱいだったはずですが、しかし、目の前で我が子が絶望の淵にいる。この私が泣いてはいけけない

と、お母さんは必死の思いで富弘さんに笑顔を向け、生きる力を与えようと思つたのではないのでしょうか？

道元禅師さまのみ教えに四摂法と言う四つの教えがあります。その中のひとつに「同事」と言う教えがございます。道元禅師さまは「同事というは自にも不違なり、他にも不違なり、他をして自に同ぜしめて、後に自をして他に同ぜしむる道理あるべし」とお示しになられ、相手を思い敬い、相手の立場に立ち、相手のために何かをしようとする大切な心を諭されました。

それは、富弘さんのお母さまが笑顔で寄り添った姿そのものでありましよう。やがて、富弘さんは、お母さまの懸命な励ましの中で自分をとり戻し、絵筆を口にくわえて詩や絵を描くようになります。

その絵筆には、富弘さんが「苦しいのは自分だけではなかった、お母さんはもっと悲しみ苦しんでいたんだ」という、気付きが込められていた。その作品には、お母さまへの心からの感謝が込められていた。

富弘さんは絵筆をとるようになった後、入院中にキリスト教の洗礼を受けておられま

す。宗教こそ違えども、富弘さんのお母さまの心と行い、富弘さんの絵と詩に込められた心は、「同事」というみ教えの実践に他なりません。

相手を思い、相手を敬う心を忘れずに、今日の一日、明日の一日を過ごしてまいりましよう。

高知県浄土寺 伊藤正賢師

令和四年四月十一日〜二十日

◆ 優しい言葉・ 思いやる言葉

去年九月頃のことです。寺務所でインターネットを見ていると、ある画像が目にとまりました。それは葉祥明さんという絵本作家さんが書かれた「母親」というものは」という題の一枚のポストカードでした。

そのポストカードにはこういう詩が書かれていました。「母親というものは無欲なものです。我が子がどんなに偉くなるよりも、どんなにお金持ちになるよりも、毎日元気でいてくれることを心の底から願います。どんな高価な贈り物より、我が子の優しいひと言で十分すぎる程幸せになれる。母親というのは実に本当に無欲なものです。だから、母親を泣かすのは、

この世で一番いけないことなのです。」と。

思わず二度、三度と読み返しました。そして、さらに何度か読むうちに目頭が熱くなつて来たのを覚えております。

幼き頃は、親に歯向かうことも無かった私でありましたが、いわゆる反抗期がやってまいります。要らぬ知恵が付き、あれはたしか小学校の高学年になった頃です。母親に何を言われたのかはもう覚えていないのですが、何か無性に腹が立っていました。そして、その時に私が母親に返した言葉がこうでした。「母ちゃん、何で僕を産んだんや。そんなんやったら産まんで良かったじゃない」母は、黙ってその言葉を聞き、声も出せずに、ただ、私を寂しそうに見つめていました。

そして、しばし時を置いて、私の名を呼びながら「すまなかったね」と一言だけ発し、目を真っ赤にして、涙が、一つ二つと零れ落ちたのです。しまつた!と思っただけでも、もう遅かったのです。

あのときの光景が、葉さんの詩の向こうに見えて来たのです。そして、思かな私でありま

一度だけ、同じようなことをしてしまいました。地元の高校へと行きたかったのを、県外にある宗門の高校へと行かされた時でした。その時も似たような言葉で母を泣かせてしまいました。ですから、この世で一番いけないことを二度もしてしまつたということですね。

そのような私が、お釈迦さまや道元禅師さまのみ教えを語っているモノか、正直悩むのですが、道元禅師さまは、相手が誰であれ、慈しむ心で接することを説かれています。その中のひとつに「愛語」というみ教えがございます。そのお示しには、慈愛の心をもつて、優しい言葉、相手を思いやる言葉で語りなさいとあります。

言葉遣いはけて褒められたものではないけれども、相手のためを思い「馬鹿野郎!何やってんだ気をつけろ!」と、強い言葉を使うこともあるかもしれませぬね。でもそれも、相手の事を案じればその言葉ですよ。

しかしながら、そうなのです、私が吐いたあの言葉、「母ちゃん、何で僕を産んだんや。そんなんやったら産まんで良かったじゃない」は、決して母の事を思いやる言葉では無かったの

です。

葉さんの詩に出会って、今は亡き母を思い、母なりの精一杯の愛情で育ててくれたことに感謝すると同時に、道元禅師さまの愛語のみ教え、慈愛の心をもつて優しい言葉、相手を思いやる言葉を使うということの大切さをあらためて噛み締めたことでした。

高知県浄土寺 伊藤正賢師

令和四年四月二十一日〜三十日

◆新緑の季節

桜の名所で有名な千光寺山にある尾道市立美術館の警備員さんと、近所のレストランに飼われている黒猫との館内への侵入とさせられるニュースとして話題である。

ウチの東堂さん(先代住職のこと)の最近の楽しみは、境内に遊びに来る小鳥との語らいである。頭が瑠璃色で胸が赤茶色のきれいなつがいの小鳥が、この数年ほど境内に姿を見せるようになった。東堂さんが掃き掃除をしていると、挨拶するように一回りしてきれいな声で鳴いてくる。嬉しくなつて東堂さんからも「おー

い、おいつ。」と声を掛けると、ちゃんと答えてくれる。そのうちに庫裡にいる時にも、外から呼ぶようにきれいな声をさえずるようになった。小鳥とのやりとりの様子を端から見れば、誰もいない空へ向かって何やら話しかけているようで恥ずかしいので、東堂さんだけの秘かな楽しみとしておいた。

先日、その小鳥とのやりとり中に、お参りのお檀家さんに「あら、かしこい(小鳥)ねえ。」と、ついに声をかけられてしまった。「どうとう、見つかったしまったわい。」と頭を掻き掻き帰ってきた。

動物たちと仲良くするには、猫にしても小鳥にしても、自然に生きる動物としての警戒心が強いので、まずは驚かさないうちに徐々に距離を詰めていき、向こうが危険が無いと分かるまで自分のことを探らせてやる。何よりも、お互いに興味があつて仲良くなり

たいと願う心が肝心である。俗に五月病といって、新しく進学や就職をして環境変化の一ヶ月を過ごし、連休明けに一休みして緊張が緩むせい

か、なぜだかモヤモヤして学

校や職場へ行きたくないと思うことがある。新しく人間関係を築くのが難しいと感じることもあるだろうか。そんな時には、いっぺんに頑張ろうとしなくても、一人ずつでも徐々に距離を詰めながら打ち解ければ良い。何よりも仲良くなりたいたいと願う心が大事である。

尾道の黒猫も、人の押し寄せる桜の花見の大賑わいの時には姿を見せず、一息ついた新緑の季節に姿を見せるそうだ。東堂さんの小鳥とのやりとりも、雛が巣立ちを迎えて旅立つ前までしばらくは続いている。仲良しというものは人に見せびらかすものではなく、お互いに分かっているに充分に良いものである。

瑞應寺専門僧堂知客 家古谷光祥

令和四年五月一日〜十日





■白眉殿落慶法要

五月二日(月)、白眉殿の落慶式が、村上山主導師のもと厳修された。

当日は、新型コロナウイルス感染予防の為、瑞應寺総代様、工事関係者(白石工務店)様のみの参列のもと行われました。



無事落慶式を迎えることができましたのも、全国の各御寺院様、瑞應寺檀信徒様、当僧堂安居者の皆様、銀杏購読者様の御寄付の賜と、東堂をはじめ住職、役寮、衷心より御礼申し上げます。

今後は、展示の様子を随時銀杏誌にてご案内申し上げますので御来山頂ければ幸甚に存じます。



今春上山者紹介

有難い御縁を頂いて、ここで学ばさせて頂けることに感謝しております。一瞬一瞬を大切に励んで行きます。

広島県 少林寺 徒弟

峯岡 徳彦

(令和四年四月十七日上山)

公務員を退職し、四月から瑞應寺専門僧堂で安居させて頂くこととなりました。これまでの生活がまさに激変し、困惑と不安な気持ちになることもあります。しかしながら時節因縁により、このような機会を頂いたことを、自覚し、日々努力を重ね、一つでも多くのことを学んで行きたいと思っております。

愛媛県 隆慶寺 徒弟

天時 清之

(令和四年四月二十二日上山)



五月の日鑑

一日	祝禱
二日	白眉殿落慶法要
十日	参玄会(十二日迄)
十五日	祝禱・略布薩
十八日	観音講・勉強会
廿八日	大玄一光大和尚 廿七回忌速夜諷經
廿九日	大玄一光大和尚 廿七回忌正當諷經
卅一日	略布薩

六月の予定

一日	祝禱
七日	参玄会(九日迄)
十四日	配役行茶・首座入寺式 楞嚴会啓建
十五日	土地堂念誦・庫司点湯 祝禱
十八日	小参・人事行礼 略布薩
廿日	観音講・勉強会 ベルモニー合同慰霊祭
卅日	略布薩

銀杏感謝録

秋田県	補陀寺 殿
広島県	徳雲寺 殿
大阪府	船越久人 殿
広島県	医王寺 殿
広島県	西林寺 殿
広島県	玉泉寺 殿
愛媛県	善福寺 殿
新潟県	東龍寺 殿
埼玉県	小林和子 殿
秋田県	雲巖寺 殿



鐘声

ある論文に、人は人の声が一番忘れやすく、人のにおいが一番忘れにくいとありました。そういうわけてみると、そのような気がいたしますが、五感以外で言うならば、記憶・思い出特に、恩に感じたこと、衝撃的な出来事は、なかなか忘れるものではないように思います。

修行生活は、普段とは違う生活をする場、また、たくさん人に恩を感じる場です。とてもじやありませんが、忘れるような経験ではありませんでした。今までの修行での思い出、経験、たくさんの人への感謝を忘れることなくこれから修行生活に励んでいきたいと思えます。

堂行寮 英俊

愛知県	高田栄助 殿
鳥取県	国分寺 殿
山口県	横山知玄 殿
島根県	岩瀧寺 殿
岩手県	長福寺 殿
長野県	圓福寺 殿
島根県	完全寺 殿
愛媛県	道旧寺 殿
山口県	洞泉寺 殿
広島県	目黒俊治 殿
山口県	廣福寺 殿
静岡県	常雲寺 殿

(令和四年四月一日受付迄)